

今朝は世界宣教に関連して使徒働きから学んでいきます。

1. どの国の人であっても (34~38節)

①かたよらず (34~35) 「そこでペテロは、口を開いてこう言った。『これで私は、はっきりとわかりました。神はかたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしくみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。』」使徒ペテロは百人隊長コルネリオと会い、その証しを聞いた時に、神はユダヤ人でない人々にも救いの御手を伸べてくださろうとしていると感じるようになりました。そこで、神は偏らず、どの国の民であっても信じる人は受け入れてくださると伝えます。

②すべての人の主 (36) 「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。」また、イエス・キリストが平和の宣教を、主にイスラエルの民になさった方ですが、どの国の人々にとっても主となってくださる方であることを伝えます。

③ナザレのイエス (37~38) 「あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事がらを、よくご存じです。それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。」そのうえでナザレのイエスが聖霊の力で、ガリラヤやユダヤで伝道をされたこと、神がともにおいて、いやしのわざがなされたことを伝えます。

2. 福音を伝え (39~43節)

①十字架の証人 (39~40) 「私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。」そして、ペテロは、人々によりキリストは十字架につけられて死に、三日目によみがえられて、人々の前に現れてくださったことを証人として、述べています。

②よみがえりの証人 (41~42) 「しかし、それはすべての人々にではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに食事をしま



した。イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。」ペテロは復活のキリストと会い、共に食事をした者として、それを証します。そして、その主が生きている者と死んだ者たちのさばき主(救い主)であることを伝えるようにと命ぜられたと伝えます。

③罪の赦し(43)「イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる、とあかし

し
ています。」 預言者たちがメシヤとして預言していたキリストを信

じるこ
とは、罪の赦しを得ることにつながるというのです。罪の赦しの根

本は愛な
る神、キリストから来ます。この赦しをいただいた者は人を赦す心

へと導か

れていきます。

3. 異邦人に聖霊がくだり(44~48節)

①聖霊がくだり(44~45)「ペテロがなおもこれらのことばを話しつづけているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。」さて、こうしたメッセージを聞いている人々のうちに、驚くべきことに聖霊が下ったのです。あのペンテコステの時に聖霊降臨を体験したのは、キリストの弟子達で、ユダヤ人たちでした。ところが、今ここにいるのは割礼を受けていない異邦人たちでした。彼らのうちに聖霊の賜物が注がれたのです。

②聖霊を受けて(46~47)「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。『この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマをうけさせないようにすることができましようか。』彼らは聖霊の賜物としての異言(神が与えられた言語)を話し、神を賛美したのです。明らかに、これは人間から出たものではなく、神が賜ったものだと、そこにいた者たちを確信させました。父と子と聖霊の御名によってバプテスマを受けることが正しいと確信させたことでした。

③バプテスマ(48)「そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日滞在するように願った。」ペテロはキリストの御名によって、彼らがバプテスマを受けるようにすすめたのです。それは、キリストの大宣教命令に基づくことでもありました。ここにきて、ペテロはイエス・キリストの命ぜられたことの意味を、実感したことでありましょう。

《結論》

なぜ世界宣教が必要なのでしょうか。クリスチャンが少ないこの国では国内伝道がままならないのに、どうして海外宣教なのでしょう。

第一に、主は「国」にではなく、「人」に興味を持っておられるということです。ここで使徒ペテロは、目の前にいるコルネリオというローマの百人隊長に対し、イエス・キリストについて語りました。キリストの十字架と復活を語ったのです。復活については自らの証しも含めて伝えました。福音は万人にあてはまるメッセージだからです。福音は人にとって最重要な情報です。そして、福音宣教は、人を選びません。目の前にいる人に福音は有効です。つまり、語る場所が例えば日本なら、そこにいる人々に福音を伝えます。また、海外であれば、そこにいる人々に福音を伝えます。畑は世界なのです。語るのそこにいる人々です。場所が問題なのではなく、人なのです。

第二に、福音の国際性です。ペテロは10章の前半にあるように、ユダヤ人以外が救われるということについて懐疑的でした。それどころか、28節にもあるように、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは律法にかなわないと考えていました。ところが、主に促されてコルネリオの所に行き、福音を伝えました。異邦人の信仰の真実に触れたときに、ペテロの心のうちに変化が生じました。つまり、福音は人種や国籍を越えたものであると理解しはじめたのです。ペテロは、キリストにより罪の赦しが与えられるとも伝えました。すると、彼らは信じて、異言で話し、賛美し始めました。それはユダヤ人クリスチャンたちには驚きでした。彼らは異邦人であっても、バプテスマ(洗礼)を受けるしかないと確信させました。福音には国や人種を越えさせ、世界大に伝えさせる必然性があるのです。

第三に、世界宣教は愛です。ペテロはユダヤ人ではない人々がキリストを信じる事実を見ました。また、聖霊が働いてくださっている様子を確認しました。その時に、彼らに洗礼を受ける道を模索しました。そうすることには勇気が必要でした。先入観を越えた、積極的な愛が求められました。しかし、主が教えてくださった

人との関わりの戒めは 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(マタイ 22:39) です。宣教を愛という面から考えれば、海外宣教を主は喜んでくださるのです。そこには、犠牲や困難もありますが、海外宣教には福音とキリストの愛が豊かに現れるのです。主が喜んでくださることをなすことは、教会の使命ともなります。

実際的なことを言いましょう。宣教師の働きは用いられます。宣教地の民は外国から来た人の話に興味を持ちます。この国の宣教においても、宣教師はよく用いられました。彼らは自らの国と故郷を後にして、外国での働きに献身します。そこに、人々はとても興味を持つのです。「あなたがたは言って、あらゆる国の人々を弟子とみなさい」(マタイ 28:19) と主は命令されました。それに従って働く宣教師たちのために、祈りましょう。困難もありますが守られますように。働きが支えられるよう、海外宣教報などを手にして、ともに祈っていきましょう。